

## 悔い改めなければ滅びる

ルカによる福音書 13 : 1~5

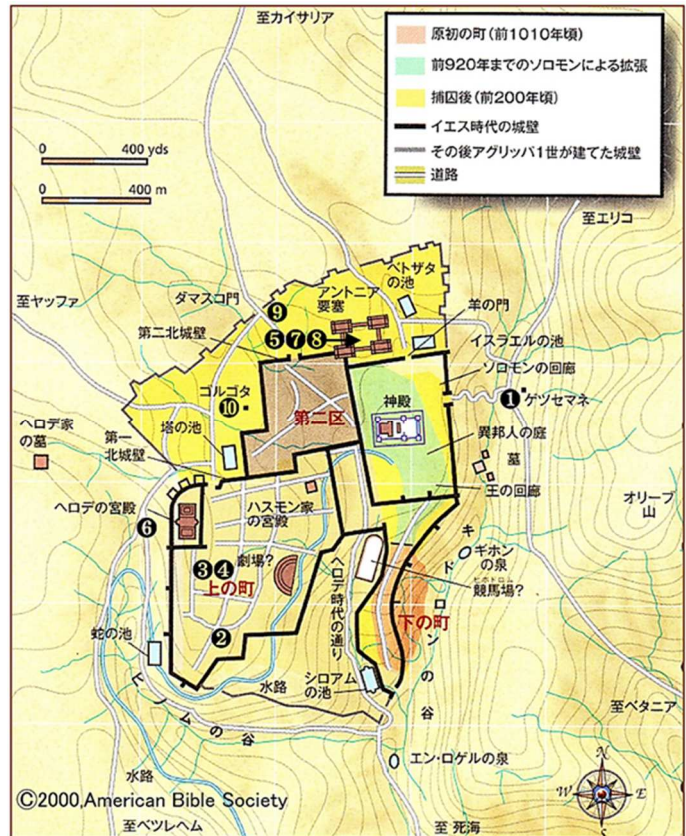
01 ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。

→ポンテオ・ピラト Pontius Pilatus、生没年不詳、ローマ帝国の第5代ユダヤ属州総督(在任:AD26~36)でユダヤの神殿や宗教的習慣を軽視する冷酷な指導者だった(通常、ローマの指導者は神殿での礼拝には干渉しなかった)。

エルサレムにいる時は、神殿を見渡せる「アントニア要塞」に住んでいた。

ガリラヤ人は、熱血的、革新的で考えも浅く、度々ローマに反旗を翻し、ピラトを殺し、ローマを倒して、自由国家を望んだ革命者たちでした。彼らは、過越祭の時、エルサレムで人々がごった返す中、騒動を起こし、ピラトの暗殺を考えたとされます。しかし、ローマ兵によって捕えられ、ピラトの前に引きずりだされ、殺されました。しかも彼らの血は神殿の牛・羊の血と共に混ぜられて献げられました。

イスラエル北部のガリラヤ地方は、異邦人のガリラヤと呼ばれ、ユダヤからは低く見られていた。彼らは誰よりも罪深く、このような死に方をするのも罪深さから来ていると思われていた(→宿命論的な因果応報の考え)。



02 イエスはお答えになった。

「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも(神に敵対し、律法に従わない) 罪深い者だったからだと思うのか。

03 決してそうではない。言うておおくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。

→当時、罪深い者の上には悪いことが起きると信じられていた。しかし、イエス・キリストは、それを完全に否定されました。罪深い人、罪深くない人というのではなく、全ての人が、罪深く、自らの罪を悔い改め、神に立ち帰るべきだと、言われました。

04 また、(外敵から守る為の)シロアム(Siloam=遣わされた者)の塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。

05 決してそうではない。言うておおくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

→ヒゼキヤ王がギホンの泉からシロアムの池に水を引いてきたという記録が旧約聖書(列王記下20:20)にあります。

→列王記下20:20

ヒゼキヤ[在位:BC716~687]の他の事績、彼の功績のすべて、貯水池(→アッシリア軍の侵攻に備えて造られた。)と水道(→ギホンの泉からシロアムの池に至る地下水路で、サムエル記下5:6~9には、ヒゼキヤより約300年も前にダビデ王[在位:BC1000~961年頃]がこの地下水路-水くみのトンネル(同5:8)-を造ってエルサレムの城内に入ったと記されており、この水路はヒゼキヤが最初に着工したものではない。)を造って都に水を引いたことは、『ユダの王の歴代誌』に記されている。

→シロアムの塔が倒れたのも、たまたま起こった事故で、その塔の補修工事の作業員（その塔の側にいた人々）18人が、偶然、災難にあってしまったことで、18人の者が、誰よりも罪深い人ということではないのです。

ピラトによって殺されたガリラヤ人と同様に、このシロアムの塔の事故の犠牲者を誰よりも罪深い人々と考えた世間の何の根拠もないわさに対して、イエス・キリストはそれを否定されました。

イエス・キリストはどんなに立派な人もそうでない人も、ガリラヤ人もピラトも神の前に自らの不完全さ、足りなさ、弱さを認めて、自らの罪を神の前に悔い改める事を第一の成すべき事として説きました。神との正しい関係を築く「悔い改め」は、人がなすべき、第一の成すべきことなのです。

まず第一にすべき事は、自らの罪を認め、神への悔い改めをする事であるとイエスは言われました。確かに、事故や事件の教訓はありますが、それ以上のものはないのです。

→『ユダの王の歴代誌』を含む15聖句＝列王記上14：29、15：7、15：23、22：46、列王記下8：23、12：20、14：18、15：6、36、16：19、20：20、21：27、25、23：28、24：5

### 【参考】悔い改め(メタノイア metanoia)

①悔い改め(メタノイア、ギリシア語)に対応するヘブライ語は、「ニツハム」(=have compassion with)つまり「痛み、苦しみを共感・共有する」ということです。

→完全な方向転換、悔い改める=自分の心を変えることで、救いを獲得するための行いではない。

→悔い改めて、神の前にへりくだった民を、神は神の御心にかなう言動ができるようにしてくださる、と約束しておられます(申命記30：1～10)。

→「悔い改めて福音を信じなさい」と言われた(マルコによる福音書1：15b)。

→わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。

だから、熱心に努めよ。悔い改めよ(黙示録3：19)。

→聖書には、「悔い改め」という言葉が全部で71回登場します。旧約聖書には、11回登場(聖句数11)し、新約聖書には、60回(聖句数56)します。

②蓋世功労、当不得一個矜字。弥天罪過、当不得一個悔字。(菜根譚 前集18項)

→世を蓋(おお)うの功労も、一個の矜(きょう)の字に当たり得ず。天に弥(わた)るの罪過も、一個の悔(かい)の字に当たり得ず。

→罪は悔改めることによって消える。一時代を圧倒するような大きな功績(手柄)も、それを誇る(=矜)ようでは台無しになってしまう。空一面に轟く様な大きな罪も、悔いの一文字に太刀打ちできない(悔いて反省すれば帳消しになる)。自分のした罪を認め、詫び、償い、同じ過ちを繰り返さないためのあらゆる努力をしなければならない。

③人聖人に非ず。誰か過ち無からん。過ち有りと雖も、之を知りて能(よ)く改むれば、即ち過ち無きに帰す(「慎思録(しんしらく)」貝原益軒)。

④過ちて改めざる、是を過ちと謂う(「論語」孔子)。

### 悔い改め(メタノイア metanoia)



### 【参考】因果応報

過去および前世の行為の善悪に応じて現在の幸・不幸の果報があり、現在の行為に応じて未来の果報が生ずること、人の行いの善悪に応じてその報いも善悪にわかれるということ。

仏教のことばで、「因果」は、因縁(原因)と果報(報い)。ある原因のもとに生じた結果・報いの意。一般には、悪い行いに対する悪い報いの方が多い。

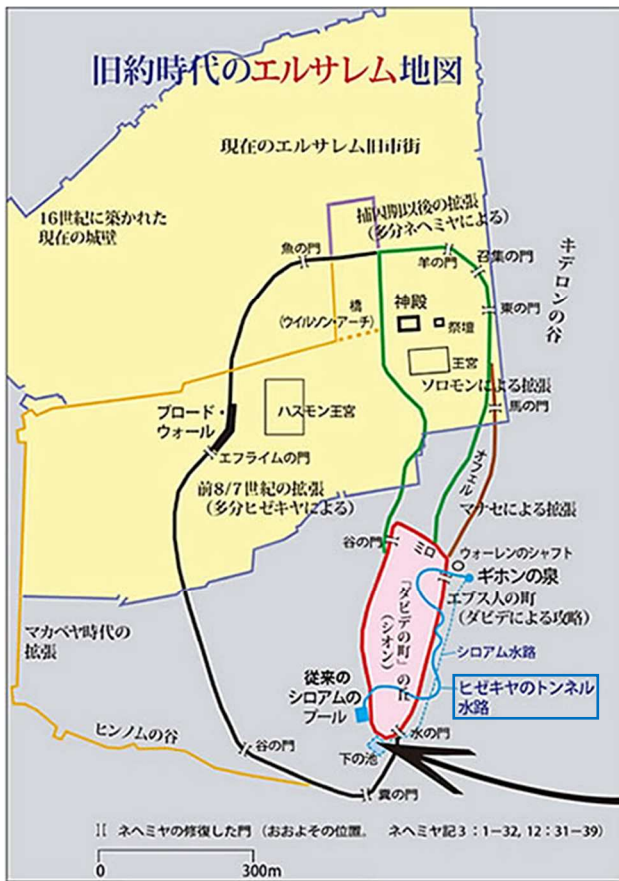
出典：大慈恩寺三蔵法師伝七

類語：自業自得、善因善果、悪因悪果、三世因果など

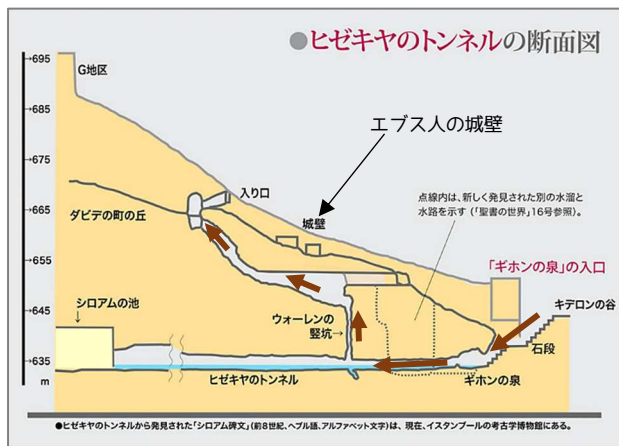


【参考】旧約時代のエルサレム地図、ヒゼキヤのトンネルの断面図

出典（図等）：聖書考古学資料館



「ギホンの泉」の水は今も「ヒゼキヤのトンネル」を流れている。この場所の先に、新たに新約聖書時代の「シロアムの池」が発見された。新たに発掘された「シロアムの池」の一部 (写真：T. Sato) ↑



➡ダビデたちが通ったとされる経路

出典（図等）：聖書考古学資料館（上図のダビデ経路➡等を除く）